

喜界島における高年者の居住状況と住意識

—喜界町高年者生活実態調査報告—

古川 恵子

1. はじめに

わが国は高齢化社会を迎え60歳以上の人のいる世帯の総世帯に対する割合は1982年には32.5%（厚生行政基礎調査）に達しており，その家族構成は，単独世帯11.4%，核家族的世帯33.0%，三世帯世帯43.9%である。単独世帯や核家族的世帯は，高年者の健康が衰えたり，配偶者を失くしたとき三世帯世帯やその他の親族世帯へ移行することも考えられるが，現在の家族の老親扶養能力はひじょうに弱く，住宅事情もからんで，たとえ同居したくても現実には困難な状況にある。

それにもかかわらず現在の住宅政策は，個人の能力にまかせる持家政策であり，老人福祉の重点が施設収容から在宅対策へ転換されようとしているところにみられる同居政策である。

世帯主の年齢が65歳以上の世帯は総世帯の9.2%であるが，持ち家率は全国平均で76.3%，鹿児島県はもっと高く平均91.9%にも達している。そして高齢者のいる世帯全般についていえることは，建築時期の古い住宅が多く，なかでも単身世帯はとくに終戦前のものが多く，約25%をしめ，その老朽度の高さが問題となっていることである。

高齢者率は鹿児島県は12.7%で，島根県，高知県について全国第3位である。高齢者のいる世帯の割合は30.3%で全国平均の24.9%に比べてやや高く高齢化が進んでいることがわかる。加えて都市化の進んだ地域同様，老人のいる世帯の核家族化も進み，また過疎の問題もある。¹⁾

来るべき本格的高齢社会に向けてあらゆる分野からの検討がなされているが，本報は前報²⁾の鹿児島市の高年者の居住状況と住居に関する意識調査に続き，過疎の離島の高年者を対象としたものであり，両者の比較をするとともに分棟型住居形式の残る地域で特に高年者の住居のもつ独特の問題を探ろうとしたものである。

2. 調査の概要

2-1 調査対象

鹿児島県大島郡喜界町の昭和59年7月の住民基本台帳の60歳以上の男性999人と女性1987人の計2986人から，特別養護老人ホーム（喜界園）に入所中の男性19人女性61人を除く2906人について無作為4分の1を抽出し，581人を対象とした。

2-2 調査期間と調査方法

昭和59年8月25日～28日の4日間にわたり調査票による面接調査を実施した。調査は喜界町の11人を含む25人の短大生と、夜間の調査等のため10人の男子大学生により実施した。

2-3 回収状況

対象者581人中有効回収票452票で回収率77.8%であった。対象者のうち43人(7.4%)が入院中・旅行中の長期不在、32人(5.5%)が病気・心身障害等で調査不能、24人(4.1%)が調査拒否、9人(1.5%)が転居、5人(0.9%)が該当者なし、5人(0.9%)が死亡、11人(1.9%)が無効であった。

2-4 調査地点の概要

奄美大島の東25km、鹿児島市から383kmに位置し、面積約56km²・周囲約48kmの隆起珊瑚礁からなる島である。基幹産業は大島紬とサトウキビの栽培である。

就労人口5254人、第一次産業24.0%、第二次産業45.1%、第三次産業30.8%で鹿児島県全体と比較して、第二次産業従事者が著しく多い。(昭和55年国勢調査)。

人口は58年推定10687人で、人口減少が続いている。昭和55年の15歳未満の年少人口率は23.1%(鹿児島県22.4%)、15歳～64歳の生産年齢人口率58.5%(64.9%)、65歳以上の高齢人口率18.4%(12.7%)で、人口の高齢化が進行している。

3. 調査の結果および分析

3-1 住宅の状況

(1) 持家率

喜界町の高年者の持家率は96.2%で、前報の鹿児島市の高年者の持家率88.5%を大きく上まわるものである。(表-1)

表-1 居住状況

	持家率(%)	昭和35年以前住宅率(%)	戦前住宅率(%)	木造住宅率(%)	一住宅当り室数(室)	一住宅当り畳数(畳)	一人当り畳数(畳)	敷地面積(m ²)	最低居住水準(%)
全 国	62.3	24.2	10.6	46.3	4.74	28.63	8.58	258	11.5
鹿 児 島 県	71.2	34.1	13.7	63.6	4.38	23.03	7.96	284	12.9
鹿 児 島 市	50.8	17.9	—	27.4	4.00	—	7.30	185	15.0
奄 美 地 域	69.7	26.7	—	76.9	4.21	—	7.33	260	19.4
鹿児島市高年者世帯	88.5	29.2	—	—	4.80	—	—	—	—
喜界町	96.2	32.1	9.7	96.0	4.78	24.42	9.65	—	9.96

*1 昭和59年2月調査結果

*2 本調査結果

*1, *2以外は昭和58年住宅需要実態調査

喜界島における高年者の居住状況と住意識

一般世帯の持家率は全国平均では徐々に増加しているのに対し、鹿児島県は減少しており71.2%であるが、それでも全国平均の62.3%より高い。奄美地域（奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島）は69.7%で県平均より低く、他地域と比べても低い。高年者の持家率の全国平均は86%（「老後の生活と意識に関する調査」昭和48年）、世帯主の年齢が65歳以上の世帯は76.3%（昭和58年住宅統計調査）であるが、鹿児島県の高齢者の持家率は、単独世帯が87.2%、高齢者夫婦のみの世帯95.6%、三世帯世帯93.0%で、平均91.9%になる（昭和58年住宅需要実態調査）。高齢者のいる世帯のほとんどが持家ということになる。

喜界町の高年者のいる世帯の持家率を家族形態別にみると（表-2）、単独世帯93.0%、夫婦のみの世帯97.3%、夫婦と子どもの世帯97.0%、三世帯世帯98.3%で鹿児島県の値をいずれも上まわる。

なお、全国の高齢者世帯では単独世帯59.1%、夫婦のみの世帯79.2%、三世帯世帯93.9%の持家率となっている。

表-2 家族形態と所有形態

	単独世帯	夫婦のみの世帯	夫婦+子	三世帯世帯	その他の世帯	合計
持家 %	107 93.0	146 97.3	65 97.0	59 98.3	58 96.7	435 96.2
民営借家・借間 %	4 3.5	1 0.7	2 3.0	1 1.7	0 0.0	8 1.8
公営住宅 %	1 0.9	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.2
その他 %	3 2.6	1 0.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	4 0.9
無回答 %	0 0.0	2 1.3	0 0.0	0 0.0	2 3.3	4 0.9
合計 %	115 100.0	150 100.0	67 100.0	60 100.0	60 100.0	452 100.0

本調査の結果の値は、奄美地域全体と比べて高いのはもちろんであるが、鹿児島県の高齢者のいる世帯や全国の高年者の持家率よりも高い。

(2) 建築時期

戦前住宅は9.7%で、全国平均10.6%、鹿児島県13.7%に比べて少ない。しかし、昭和35年以前の住宅は32.1%で、木造率100%である。奄美地域の昭和35年以前の住宅が26.7%であるのに対し、高い値であるが、鹿児島県の34.1%よりは低い。ただし鹿児島市の高年者は29.2%であるので（表-1）、これより喜界町の高年者の住宅の値が高い。結局老朽化は高年者にとって大きな問題であり、

喜界町においては、 $\frac{1}{3}$ の老人にとってこれから更に深刻な問題になろう。昭和35年以前の住宅の改善希望は48.9%で、36年以後は41.1%といく分少ない。

家族形態別にみると（表-3）、単独世帯の37.4%、夫婦のみの世帯の33.3%、夫婦と子どもの世帯の31.4%、三世帯世帯の20%が昭和35年以前の住宅である。単独世帯における老朽化の問題は一般的にいわれることではあるが、喜界町においても例外ではないことがわかる。

表-3 家族形態と建築時期

	単独世帯	夫婦のみの世帯	夫婦+子	三世帯世帯	その他	合計
終戦前 %	15 13.0	14 9.3	6 9.0	3 5.0	6 10.0	44 9.7
昭和21～25年 %	7 6.1	9 6.0	1 1.5	3 5.0	3 5.0	23 5.1
昭和26～35年 %	21 18.3	27 18.0	14 20.9	6 10.0	10 16.7	78 17.3
昭和36～45年 %	42 36.5	44 29.3	25 37.3	22 36.7	18 30.0	151 33.4
昭和46～50年 %	8 7.0	21 14.0	9 13.4	12 20.0	8 13.3	58 12.8
昭和51～55年 %	8 7.0	23 15.3	8 11.9	10 16.7	6 10.0	55 12.2
昭和56年～ %	7 6.1	10 6.7	3 4.5	4 6.7	7 11.7	31 6.9
無回答 %	7 6.1	2 1.3	1 1.5	0 0.0	2 3.3	12 2.7
合計 %	115 100.0	150 100.0	67 100.0	60 100.0	60 100.0	452 100.0

（3）構造・建て方

木造がほとんどで96.0%、RC造2.0%、CB造1.1%、その他0.2%となっている。木造の $\frac{1}{3}$ にあたる33.4%が昭和35年以前に建てられたもので、33.6%が昭和36年から45年までの間のものである。非木造のRC造やCB造等は昭和36年以降に建ち始め、木造住宅の割合はわずかずつ減っている。

建て方では平家が94.7%、2階建が4.2%であるが、木造の97.2%は平家、RC造の77.8%が2階建、CB造の60.0%が平家である。建築時期の早いものほど平家が多い。

一戸建も多く93.8%を占める。残りのうちの17戸（3.8%）は二戸建と答えており、敷地内に二棟の住宅が建っていることを示す。

（4）規模－居室室数・畳数

住宅の居室の平均室数は4.78室、居室の合計畳数の平均は24.42畳で、鹿児島県の一般世帯の4.38室、23.03畳を上まわるが、全国平均（4.74室、28.63畳）よりやや狭いといえる。奄美地域は4.21

喜界島における高年者の居住状況と住意識

室であり、一住宅当りの床面積では他地域より極めて小さいという特徴をもつが、喜界の高年者世帯は比較的良いといえる。前報の鹿児島市の高年者世帯では4.8室、26.6畳であり、本調査の結果をわずかに上まわる程度である。

また一人当たり畳数は9.65畳／人で、鹿児島県の一般世帯7.96畳／人や全国平均8.58畳／人をはるかに上回るが、鹿児島市の高年者世帯の10.21畳／人をやや下まわる。

以上のことから奄美地域の一般世帯の住宅規模は小さいものの、高年者世帯では過疎が加わり一人当たりの畳数が多くなることがいえよう。また鹿児島市と喜界町との著しい地域差もないといえよう。

(5) 居住水準

最低居住水準未達世帯（第4期住宅建設5箇年計画）－居室室数と世帯人員数の関係による－は、9.96％である。一般世帯については表－1のとおりであるが、なかでも奄美地域は、鹿児島県（12.9％）や全国平均（11.5％）より著しく多く19.4％で県内でも極めて高い値を示す。従って、喜界町の高年者世帯の居住水準はこれらに比較して、それほど問題はないようである。ただし、世帯構成員の性、年齢等は考慮に入れず、同居人数のみで検討を行なったため、値は若干変わる余地がある。

3-2 現在のすまいに対する感じ方

3-2-1 住宅・住環境

(1) 総合評価

住宅、住環境を総合的にみて「満足している」「不満である」のいずれであるかを答えてもらった。

表－4 住宅・住環境に対する不満率

		単独世帯	夫婦のみ の世帯	夫婦+子	三世帯世帯	その他の 世帯	合計 (%)
住 宅	全 国 一 般	33.8	31.0	—	40.3	—	46.1 *
	喜界町高年者	12.2	9.3	16.4	8.3	6.7	10.6
住 環 境	全 国 一 般	24.5	23.3	—	26.9	—	30.2 *
	喜界町高年者	2.6	2.0	9.0	5.0	3.3	3.8

* 昭和58年 住宅需要実態調査

(%)

住宅に対する不満率は10.6％で全国平均（46.1％）、鹿児島県（32.8％）、奄美地域（25.1％）に比べて格段に低い。奄美地域は居住水準が低いにもかかわらず、住宅の不満率は他の地域と比べて最も低いが、さらに本調査では高年者ということで不満が低かったと思われる。

住環境に対する不満率はなお低くわずか3.8％である。全国平均（30.2％）、鹿児島県（17.6％）、奄美地域（7.3％）に比べ極めて低い。

(2) 要素別不満

住宅や住環境に不満であると答えた人は、何について不満であるのかを尋ねた結果を図－1、2に示す。

まず住宅では、いたみ具合が第1位で16.9％である。鹿児島県の分析結果（昭和58年住宅需要実態調査）では高齢者の住宅に対する不満率は総じて低いが、いたみ具合と設備、収納に対する不満がや

表-5 住宅の要素別不満率と建築時期

	全 体	広さ 部屋数	間取り	便所・浴室・ 台所等の設備	断熱性	いたみ具合	収納スペース	敷地の広さ	プライバシー
終 戦 前	11.4	15.9	18.2	18.2	25.0	34.1	18.2	6.8	4.5
S.21～25年	26.1	17.4	13.0	21.7	17.4	13.0	17.4	0	0
S.26～35年	19.2	19.2	14.1	23.1	15.4	24.4	16.7	6.4	7.7
S.36～45年	11.3	9.9	11.9	14.6	14.6	17.9	12.6	6.6	5.3
S.46～50年	5.2	10.3	5.2	10.3	15.5	10.3	8.6	13.8	5.2
S.51～55年	1.8	18.2	9.1	9.1	18.2	9.1	12.7	5.5	7.3
S.56年～	0	6.5	3.2	6.5	9.7	0	12.9	6.5	6.5

(%)

表-6 家族形態と住宅の要素別不満率

	単独世帯	夫婦のみ の世帯	夫婦+子	三世帯世帯	その他の 世帯	合 計
住宅のいたみ具 合 %	21 19.6	23 17.7	14 14.6	5 10.4	13 18.8	76 16.9
断 熱 性 %	15 14.0	24 18.5	13 13.5	7 14.6	14 20.3	73 16.2
便所・台所・浴 室等の設備 %	23 21.5	16 12.3	14 14.6	9 18.8	10 14.5	72 16.0
収 納 ス ペ ー ス %	15 14.0	20 15.4	14 14.6	4 8.3	8 11.6	61 13.6
住宅の広さ、部 屋数 %	9 8.4	19 14.6	12 12.5	9 18.8	11 15.9	60 13.3
住宅の間取り %	10 9.3	14 10.8	13 13.5	7 14.6	6 8.7	50 11.1
敷 地 の 広 さ %	5 4.7	8 6.2	12 12.5	4 8.3	4 5.8	33 7.3
プ ラ イ バ シ ー の 確 保 %	9 8.4	6 4.6	4 4.2	3 6.3	3 4.3	25 5.6
合 計 %	107 100.0	130 100.0	96 100.0	48 100.0	69 100.0	450 100.0

喜界島における高齢者の居住状況と意識

や多くみられるとしている。本調査でも同様のことがいえる。いたみ具合については建築時期が昭和35年以前のものが多くことから肯ける（表-5）。第2位には住宅の断熱性（16.2%）があがっている。遮音性についてはきかなかった。家族形態別にみると（表-6）、単独世帯では便所・台所・浴室等の設備が最も多く、三世帯世帯では単独世帯の同項目に加え、住宅の広さや部屋数が共に第1位となっている。単独世帯の住宅の老朽化に伴い、設備面でたとえば外便所、外風呂等の特殊事情も加わり、不満が多いことは容易に考えられることであるし、三世帯世帯の場合はやはり世帯人員数との関係で住宅規模に不満があるのも一般的傾向でありここでも例外ではない。

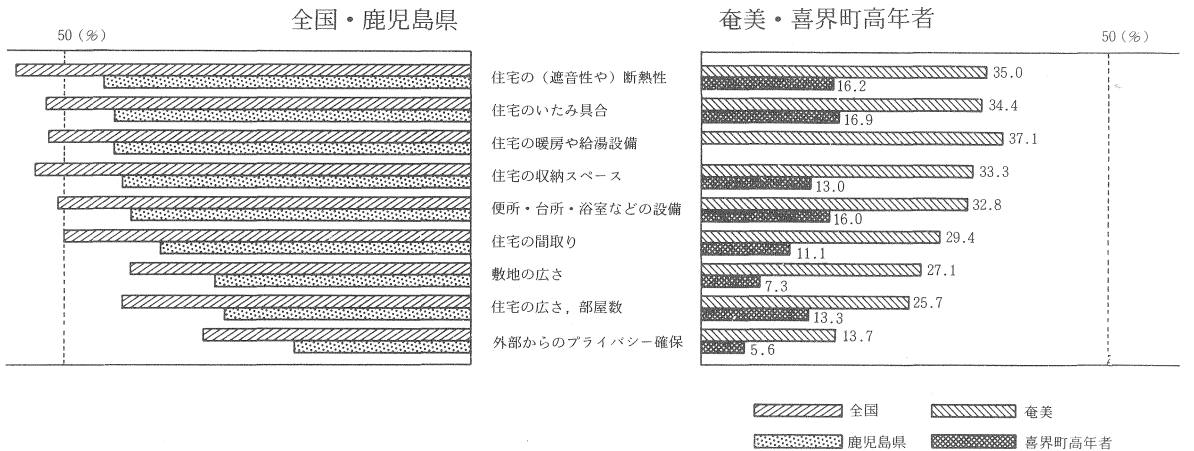
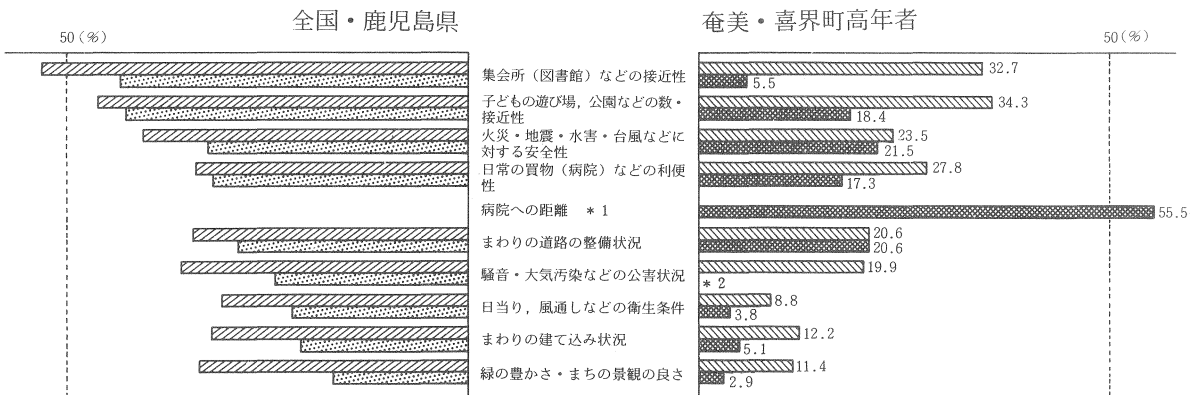


図-1 住宅の要素別不満率



* 1 本調査のみの項目。昭和58年住宅需要実態調査では、日常の買物といっしょの項目である。

* 2 本調査では質問せず。

図-2 住環境の要素別不満率

次に住環境については、本調査対象者が高齢者であることから買物の利便性と病院への利便性を分けたため、図-2でも目立ってわかるが病院への距離を不満とする割合が格別大きく55.5%である。病院への距離の不満率と健康状態との関係を見ると、「寝たり起きたり」の人と「あまり健康でない」人の不満率が高くそれぞれ61.1%、60.8%で高く、また現在「健康である」という人でも52.5%と高い値である。一方全体の44%（199人）の人は、現在病院で治療を受けている状態であることを併せ考えると深刻な問題といえる。本調査の65歳以上の人だけでみると不満率は56.6%とさらに高い値となる。（表-7）

表-7 病院への距離についての不満率と健康状態

	健 康	あまり健康ではない	寝たり起きたり	6ヶ月以上床につきっきり	合 計
満 足 %	113 40.9	52 34.0	6 33.3	1 20.0	172 38.1
不 満 %	145 52.5	93 60.8	11 61.1	2 40.0	251 55.5
無 回 答 %	18 6.5	8 5.2	1 5.6	2 40.0	29 6.4
合 計 %	276 100.0	153 100.0	18 100.0	5 100.0	452 100.0

第2位は「火災・地震・水害・台風などに対する安全性について」であり21.7%を示す。断熱上不利であるにもかかわらず、集落によってはストレート板葺の屋根の住宅を多く見かけるのも、台風時に瓦では吹き飛ばされる恐れがあるためであり、台風常襲地の島では当然ともいえる結果であろう。第3位は道路の整備状況であるが、舗装されていないため雨が降ると水たまりになったり凹凸がはげしく車の運転がしにくいなど、日常生活上困っていることと思われる。

（3）永住意向

現在のところに住み続けたいとする世帯は81.4%である。奄美地域の一般世帯は他地域よりもともと高い（77.7%）のであるが、年齢との関係もあってかそれをはるかに上まわる。鹿児島県は69.5%、全国平均は56.5%の一般世帯の値である。

3-2-2 便所・浴室

分棟的性格が極めて強いことが奄美地域の民家の特徴の一つとしてあげられているが⁴⁾、加えて旧来の農村住宅の特徴としてもあげられる外便所、外風呂は現在も残っているのか。残っている場合、それらは建築時期の古い、高齢者あるいは高齢者の住宅にみられるのではないか。そして日常生活でどのように考えられているのかを調べた結果である。

（1）便所

便所の場所は表-8にみられるように、外便所10.8%（49世帯）、内便所67.7%、外・内両方19.9%で3種類に分けられる。建築時期との関係では、昭和35年以前の住宅にやはり外便所が多くみられ、

喜界島における高年者の居住状況と住意識

外便所の59.2%はこの時期のものである。また外・内両方にある世帯は19.9%であるがおもに外便所使用が37.8%、内便所使用が57.8%、無回答4.4%となっている。

表－8 建築時期と便所の種類

	終 戦 前	S. 21～25年	S. 26～35年	S. 36～45年	S. 46～50年	S. 51～55年	S. 56年～	無 回 答	合 計
外 便 所 %	9 20.5	4 17.4	16 20.5	16 10.6	2 3.4	0 0.0	1 3.2	1 8.3	49 10.8
内 便 所 %	28 63.6	11 47.8	45 57.7	97 64.2	44 75.9	46 83.6	27 87.1	8 66.7	306 67.7
外・内両方 %	7 15.9	8 34.8	15 19.2	36 23.8	12 20.7	9 16.4	3 9.7	0 0.0	90 19.9
無 回 答 %	0 0.0	0 0.0	2 2.6	2 1.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 25.0	7 1.5
合 計 %	44 100.0	23 100.0	78 100.0	151 100.0	58 100.0	55 100.0	31 100.0	12 100.0	452 100.0

外便所の世帯の設備（便所・台所・浴室）についての満足度をみると、不満率は42.9%である。過半数は満足しているということであるが、健康状態との関係を表－9 でみると、「寝たり起きたり」、「6ヶ月以上床につききり」の人（23人）の中で外便所使用者は1人のみである。

表－9 健康状態と便所の場所

	健 康	あまり健康と はいえない	寝たり起きたり	6ヶ月以上床 につききり	合 計
外 便 所 %	32 11.6	16 10.5	1 5.6	0 0.0	49 10.8
内 便 所 %	183 66.3	107 69.9	13 72.2	3 60.0	306 67.7
外・内両方 %	59 21.4	27 17.6	3 16.7	1 20.0	90 19.9
無 回 答 %	2 0.7	3 2.0	1 5.6	1 20.0	7 1.5
合 計 %	276 100.0	153 100.0	18 100.0	5 100.0	452 100.0

外・内両方ある世帯（90人）の主に利用する方と健康状態との関係を表－10でみると、おもに外便所を使用する人の70.6%は健康、26.5%はあまり健康とはいえない人であり、健康との関係が伺える。

家族形態でみると、単独世帯で「寝たり起きたり」の状態の人は3人であるが、外便所使用1人、内便所使用2人でいずれも設備については満足している。単独世帯で寝たきりの人はいない。

表-10 健康状態と、主に利用する便所（外・内両方ある世帯）

	健 康	あまり健康と はいえない	寝たり起きたり	6ヶ月以上床 につききり	合 計
主に外便所 %	24 40.7	9 33.3	1 33.3	0 0.0	34 37.8
主に内便所 %	32 54.2	17 63.0	2 66.7	1 100.0	52 57.8
無 回 答 %	3 5.1	1 3.7	0 0.0	0 0.0	4 4.4
合 計 %	59 100.0	27 100.0	3 100.0	1 100.0	90 100.0

(2) 浴室

浴室のある世帯は93.8%，ない世帯4.9%，無回答1.3%である。

浴室の種類を表-11でみると、外風呂が38.1%，内風呂50.9%，外・内両方4.6%である。建築時期との関係では、便所と同様に昭和35年以前の住宅は内風呂より外風呂が多く、外風呂の住宅の41.3%がこの時期のものである。外・内両方に浴室のある世帯でおもに外風呂使用の人は61.9%，おもに内風呂使用は38.1%で、便所と比べると、外、内が逆転している。つまり便所はおもに内が使われるが、浴室はおもに外が使われるということである。

表-11 建築時期と浴室の種類

	終 戦 前	S. 21～25年	S. 26～35年	S. 36～45年	S. 46～50年	S. 51～55年	S. 56年～	無 回 答	合 計
外 風 呂 %	22 50.0	11 47.8	38 48.7	57 37.7	23 39.7	14 25.5	5 16.1	2 16.7	172 38.1
内 風 呂 %	17 38.6	7 30.4	35 44.9	80 53.0	33 56.9	36 65.5	20 64.5	2 16.7	230 50.9
外・内両方 %	3 6.8	3 13.0	3 3.8	5 3.3	0 0.0	3 5.5	4 12.9	0 0.0	21 4.6
無 回 答 %	2 4.5	2 8.7	2 2.6	9 6.0	2 3.4	2 3.6	2 6.5	8 66.7	29 6.4
合 計 %	44 100.0	23 100.0	78 100.0	151 100.0	58 100.0	55 100.0	31 100.0	12 100.0	452 100.0

外風呂の世帯の設備についての不満率は21.5%で外便所の不満率の42.9%の半分である。

単独世帯で「寝たり起きたり」の状態の3人のうち1人は外風呂，2人は内風呂であるが不満はもっていない。

年齢と外便所，外風呂との関係は表-12のとおりであるが，浴室は，高齢になっても外にしかない人が多いことがわかる。このことと改善要求との関係を見ると（表-13），外風呂の住宅居住者で浴

表-12 年齢と外便所・外風呂

	60歳～	65歳～	70歳～	75歳～	80歳～	85歳～	90歳～	合計
外便所 %	14 13.3	6 5.8	12 12.6	10 14.9	1 2.5	4 12.5	2 22.2	49 10.8
外風呂 %	37 35.2	32 30.8	50 52.6	20 29.9	16 40.0	13 40.6	4 44.4	172 38.1

表-13 外便所、外風呂の世帯の改善したいところ

	外便所のみ の世帯	外風呂のみ の世帯
便所 %	13 28.3	18 15.0
浴室 %	14 30.4	32 26.7
台所 %	7 15.2	21 17.5
屋根 %	3 6.5	14 11.7
外壁 %	2 4.3	8 6.7
その他 %	2 4.3	15 12.5
N.A %	5 10.9	12 10.0
合計 %	46 100.0	120 100.0

* 複数回答

室を改善したい人は26.7%（複数回答）いる。一方、外便所の住宅居住者で便所を改善したい人は28.3%である。浴室の改善要求内容については、内風呂にしたい人が極めて多く回答者の55.2%を占めており、他は燃料やタイル貼り等の希望である。

なお、「外風呂と外便所」である世帯は35で、全体の7.7%に当り年齢構成は60歳代15人、70歳代15人、80歳代4人、90歳以上1人である。また健康状態からみて（表-14）、「健康」か「あまり健康とはいえない」人どまりで問題はなさそうであるが、近い将来改善の必要がでてくると思われる。

3-2-3 改善したいところ

現在の住宅で改善したいところのある人は21.2%、改善したいけれどできない人20.8%、改善したいところのない人が54.6%である。「改善したいけれどできない」理由の第1位は「費用がかかる」（17.3%）、

表-14 外便所のみと外風呂のみの世帯の健康と満足度

	健康	あまり健康と はいえない	寝たり起きたり	6ヶ月以上床 につききり	合計
満足 %	14 58.3	6 54.5	0 0.0	0 0.0	20 57.1
不満 %	9 37.5	4 36.4	0 0.0	0 0.0	13 37.1
無回答 %	1 4.2	1 9.1	0 0.0	0 0.0	2 5.7
合計 %	24 100.0	11 100.0	0 0.0	0 0.0	35 100.0

第2位は「改善しにくい建物だから」、「その他（敷地が狭い、地形が悪い）」である。

改善したいところは表-15に示すように、1位が浴室13.8%、2位は台所9.3%、3位便所7.4%となっている。性、年齢ともに大して関係はない。

表-15 改善したいところ

	男 性	女 性	合 計
便 所 %	10 5.6	29 8.3	39 7.4
浴 室 %	24 13.3	49 14.0	73 13.8
台 所 %	13 7.2	36 10.3	49 9.3
屋 根 %	14 7.8	15 4.3	29 5.5
外 壁 %	7 3.9	10 2.9	17 3.2
その他 %	15 8.3	24 6.9	39 7.4
無回答 %	97 53.9	186 53.3	283 53.5
合 計 %	180 100.0	349 100.0	529 100.0

* 複数回答

健康状態との関係でみると表-16に示すように「6ヶ月以上床につきり」の人は、便所、浴室の改善を希望している。昭和57年度鹿児島県のねたきり老人の実態調査の結果においても浴室と便所の改善希望が多くそれぞれ54.8%と46.3%である。また健康上問題のない人でも浴室の改善が第1位である。

前出の「外風呂と外便所」の世帯の改善したいところは第1位が浴室で21.7%、2位は便所で17.4%となっている。

改善したい具体的内容は、改善希望者全員の回答は得られなかった（自由回答）ものの、多かったものを以下にあげる。（ ）内は回答数である。

1. 便所
 - ・水洗にしたい (7)
 - ・外便所を内便所に (4)
 - ・便所を広くしたい (2)
2. 浴室
 - ・内風呂にしたい (16)
 - ・燃料を変えたい (4)

表-16 健康状態と改善したいところ

	健 康	あまり健康と はいえない	寝たり起きたり	6ヶ月以上床 につききり	合 計
便 所 %	22 14.7	12 12.1	1 10.0	2 40.0	37 14.0
浴 室 %	40 26.7	27 27.3	1 10.0	2 40.0	70 26.5
台 所 %	26 17.3	19 19.2	2 20.0	1 20.0	48 18.2
屋 根 %	15 10.0	12 12.1	1 10.0	0 0.0	28 10.6
外 壁 %	9 6.0	6 6.1	2 20.0	0 0.0	17 6.4
その他 %	20 13.3	16 16.2	3 30.0	0 0.0	39 14.8
N.A %	18 12.0	7 7.1	0 0.0	0 0.0	25 9.5
合 計 %	150 100.0	99 100.0	10 100.0	5 100.0	264 100.0

* 複数回答

- ・現在ないのでほしい (3)
- ・新築の内風呂を外から直接
入れるようにしたい (1)
- 3. 台所
 - ・広くしたい (8)
 - ・古いので現代風に (3)
- 4. 屋根
 - ・雨もりがする (5)
 - ・葺きかえたい (3)
- 5. 外壁
 - ・新しくしたい (3)
- 6. その他
 - ・家を広くしたい (6)
 - ・機織りの部屋がほしい (5)
 - ・室数をふやしたい (4)
 - ・物置がほしい (4)

3-3 縁側について

最近の住宅、特に都市住宅では縁側がみられなくなっている。かつてコミュニケーションの場として、あるいは休息、家事などのために多目的に使われた場所であるが、喜界ではどのような状況か調

べた。

縁側のある世帯は84.5%，ない世帯11.3%，無回答4.2%である。縁側のある世帯にその用途を自由回答してもらった結果は以下のとおりである。

1. 来客時に使う。多人数のときにむしろ畳を敷き座敷の続きとして使う。行事（法事・祝事・祭り）のときに使う。 (69)
2. 通路として使う。他の部屋の通り抜けをしないように。 (58)
3. 夕涼み・日光浴の場所として。 (32)
4. 機織りの場所として。 (17)
5. 休息・ひるね・こしかける。 (11)
6. 庭からの出入口として。 (6)
7. その他（物干し場、子どもの遊び場等） (10)

近隣、集落のつきあいや、生計を支える大島紬を織る場所として使うということは、都市とは異なる用途である。縁側は老人の暮らしに生かされているといえよう。そして今後の住宅計画の際も考慮すべきスペースの一つといえよう。

3-4 子どもと同居している世帯について

喜界町の高年者と子どもとの同居率は33.6%であるが（表-17）、その同居形態をみると、子どもと同一建物に居住している人が86.1%，同一敷地内の別の住宅に居住している人が4.6%である。

（1）同一建物に居住している世帯について

高年者専用の部屋のある世帯は67.8%である。子ども夫婦と同居している場合の親専用の寝室設置率は全国平均76.7%，鹿児島県59.2%，奄美地域67.1%となっている。本調査結果と単純に比較はで

表-17 性・年齢別 同・別居

性・年齢		同居 %	別居 %	子ども なし %	実数 人
男 性	60-64	35.7	61.9	6.2	42
	65-69	40.0	54.3	5.7	35
	70-74	20.5	76.9	2.6	39
	75-79	18.2	81.8	0.0	22
	80以上	55.0	40.0	5.0	20
	小計	32.9	63.9	3.2	158
女 性	60-64	30.2	63.5	6.3	63
	65-69	18.8	66.7	14.5	69
	70-74	30.4	48.2	21.4	56
	75-79	40.0	46.7	13.3	45
	80以上	54.1	39.3	6.6	61
	小計	34.0	53.7	12.2	294
全 体		33.6	57.3	9.1	452

喜界島における高年者の居住状況と住意識

きないが、大体の傾向として大きな差はないといえよう。

専用居室室数は1室が最も多く、室数回答者の80.4%で、2室が15.7%である。また専用居室の合計畳数は、4.5畳以上6畳未満が37.1%で最も多い。6畳以上8畳未満がこれにつき、25.8%である。(表-18)

専用居室の向きについては、南向きに開口部が設けられている世帯は48.5%で約半分は居住性が良いようである。専用の便所をもつ人は0である。

表-18 子どもと同居している人の専用居室室数と畳数合計値

	1 室	2 室	3 室	4 室	無回答	合 計
3 畳 未 満 %	7 8.5	0 0.0	0 0.0	1 50.0	0 0.0	8 6.1
3 畳 ~ %	17 20.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	17 13.0
4.5 畳 ~ %	31 37.8	5 31.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	36 27.5
6 畳 ~ %	21 25.6	3 18.8	1 50.0	0 0.0	0 0.0	25 19.1
8 畳 ~ %	2 2.4	3 18.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	5 3.8
10.5 畳 ~ %	0 0.0	3 18.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 2.3
12 畳 ~ %	0 0.0	2 12.5	0 0.0	1 50.0	0 0.0	3 2.3
無 回 答 %	4 4.9	0 0.0	1 50.0	0 0.0	29 100.0	34 26.0
合 計 %	82 100.0	16 100.0	2 100.0	2 100.0	29 100.0	131 100.0

* 子どもと同居している人で、「同じ建物に住んでいる」と答えた人のみ。

(2) 同一敷地内の別の住宅に居住している世帯について

全体の4.6%にあたる7世帯が、「隣居」ともいわれる子どもとは別の住宅ではあるが敷地は同一というすまい方をしている。7例については、性、年齢、健康状態、老親の住宅の居住室数および居室の合計畳数、装置の有無、種類、また子どもの居住する住宅の規模と呼び方について尋ねた。結果を表-19に示すが、件数がわずかでありしかも回答が完全でないものも多いので、概況を示すに留める。

各装置については、便所は内便所4、外便所3、浴室は内風呂4、外風呂3であり、このなかで外便所で外風呂を使用している世帯は2である。また台所のある人は5人、洗面所のある人は6人で、装置は全般的に整っているといえよう。7人の健康状態は、「健康」あるいは「あまり健康とはいえ

表-19 同一敷地，別住宅の老・若世帯

老世帯 世帯番号	性・年齢	健康	室数・畳数計	便 所	浴 室	台 所	洗面所	縁 側	若世帯 室数・畳数計	よ び 名
1	女・69	○	9・24	内便所	内風呂	○	○	○	4・12	はなれ
2	男・70	△	4・21	内便所	内風呂	—	—	○	—	—
3	女・74	△	5・24	内便所	外風呂	○	○	○	6・16.5	二男の家
4	女・60	○	2・5	外便所	外風呂	×	○	×	—	—
5	女・61	○	5・18	外便所	内風呂	○	○	○	—	—
6	女・62	○	2・12	内便所	内風呂	○	○	○	5・28	店の2階
7	男・72	△	4・24	両方 主に外	外風呂	○	○	○	—	—

健康：○-健康，△-あまり健康でない 台所・洗面所・縁側：○-あり，×-なし，—無回答

ない」人だけで、「寝たり起きたり」や「6ヶ月以上床につききり」の人はないので，現在戸外の便所，浴室の使用もできるとしても加齢とともに，適切な対応が必要になろう。それには建物の機能を充実させることや居住形態の変化等が考えられる。

子どもの住宅の規模や呼び方について無回答が4あり，また主屋（おもや）と別棟の使いわけについては不明である。建築時期も終戦前，昭和21～25年，36～45年，46～50年，51～55年であり，特徴はみられなかった。

子どものいる世帯（403世帯）で子と別居している場合でも，隣りや10分未満で行けるところや10分から30分未満で行けるところに住んでいる世帯は42.6%であるので，全体の64%は親子が近くに住んでいることになる。

4. まとめ

1. 持家率が一般世帯よりも高いのは高年者世帯の特徴としても，鹿児島市よりもはるかに上まわり，地域性があるといえよう。そしてまた一方で，単独世帯が多く，他の家族形態と比べて老朽化している住宅が最も多いということがあがるが，収入も少なく，容易に改築，建て替え等のできない事態を何とか援助する手だてを考えなければならないであろう。

2. 昭和35年以前はすべて木造住宅であるが，そろそろ耐用年数を過ぎる時期になるので高年者向けの住宅政策の充実が望まれる。

3. 二戸建てについては，二棟造や分棟型が南西諸島（奄美大島およびその附属諸島）の民家の特徴といわれる背景から⁴⁾現在でも在ると考えられるが，生活様式の変化もありそれぞれの建物の使い方についてはさらに調査が必要である。しかしまた，本調査では該当世帯が少なかった（17戸）ことから，今後減少することも考えられる。

現在はこの二戸建てのうち，一棟に高年者が，他の一棟に子ども世帯が居住するいわゆる隣居形態をとるということが明らかなものが7戸あるが，過疎という条件も加わり，今後この形態が増加する

ことは考えられない。

4. 現在の住宅や住環境への不満の表われ方については、生活様式や意識の地域特性や高齢者の諦観などが考えられるが、それでもなおはっきりと出てきた上位の要因については早急に解決することが望まれる。とりわけ、医療施設については、遠いばかりでなく、内容も充分でないため他の島などへ行くと訴える老人もいて、十分な対策が必要であろう。

5. 外便所、外風呂については、不満は予想より少なかったが、健康状態の悪化により問題になることは明らかであるので、ある程度の指導は、改築や建て替え等の時には必要でないかと思われる。両方ある場合は昼夜で外・内を使い分けする場合もみられるので問題はないと思われる。

6. 一部の住宅の敷地周辺は珊瑚でできた石垣がめぐらされ、防風の役目ももつガジュマルの木が植えられていて、防災上の機能ももつが、多くの集落はブロック塀に変わっており、地震などに対する安全性確保の指導や管理が重要である。

謝 辞

本調査にあたっては、調査対象者の方々、老人会関係の方々、並びに喜界園の園長さん、町役場の建築課、家庭奉仕員の方々に御協力いただきました。ここに深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 内藤考至・川上周三・吉良伸一：現代社会の理念と現実，昭和59年，斯文堂
- 2) 南九州地域科学研究所：研究所報 第1号，昭和59年
- 3) 鹿児島県土木部住宅課：鹿児島県の住宅需要動向に関する調査研究，昭和60年
- 4) 野村孝文：南西諸島の民家，昭和36年，相模書房
- 5) 鹿児島県社会福祉協議会・鹿児島県民生委員児童委員協議会：在宅ねたきり老人実態調査結果報告書，昭和57年
- 6) 内閣総理大臣官房老人対策室監修：高齢者問題総合調査報告，昭和57年，全国社会福祉協議会
- 7) 五島利兵衛：日本建築学会中国・九州支部研究報告第3号，昭和50年
- 8) 建設省住宅局：昭和58年住宅需要実態調査結果，昭和59年